
手紙

ayu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N0847R

【作者名】

ayu

【あらすじ】

もうすぐ親友の誕生日。

手紙が欲しいと言われ、『文をしたためる』という行為について考察してみる。

（前書き）

多くの方に楽しんで頂ければ幸いです。

こちらでも注意はしておりますが、誤字・脱字等ございましたらご一報ください。

『文をしたためる』と言う行為について、ひとつ、真面目に考えてみることにした。

自身の手で綴る手紙には、果たしてどのような意味があるのか。別に、手紙に限らずとも毎年賀状やら暑中見舞いやら、定期的に手書きのものを送ってはいる。この行為によって生じる、何か『特別』なものがあるからこそ欲しいと言う要望が出るのだろうが、その『特別』とは一体何なのか。分らないが、取り敢えず手紙は書かなくてはなるまい。

というのも、遠く離れた地に居る友人に、「手紙が欲しい」とねだられたからである。

もうすぐ、彼の誕生日なのだ。彼は幼馴染で、親友。それこそ覚えていないくらい以前から、彼と私には関わりがある。そして、彼とのプレゼントの交換は毎年欠かさずにやっている慣例行事のようなもの。いつから続いているものか、もう思いだすことすら出来ないくらいだ。そして当然ながら、遠く離れた今でも毎年お互いの誕生日になるとプレゼントを贈り合っている。

十二月の、二十五日。

その日が、彼の誕生日の日だ。

クリスマスと重なる誕生日ほど虚しいものはないと彼はとても悲しそうに語るものだから、私は毎年『お誕生日おめでと』と彼にプレゼントを贈る。そしてその日は一日『メリークリスマス』という言葉は絶対に使わない。けれど彼はとても我儘で、いつもこう言うのだ。

生誕の日を言祝がれると言うのはとてもうれしい事ではあるのだけれど、このクリスマスと言うのも実は預言者イエズス・キリストの生誕の日である訳で、ああ、果たしてその言葉は僕に向けて

のものなのか、それともその預言者に向けてのものなのか。この十二月二十五日、クリスマスと呼ばれるこの日に限っては日本に来た宣教師たちの事を少しばかり恨んでしまう。年の瀬の忙しい日に生まれてきた預言者に対してだって、一つ二つなら恨み言を零しても致し方のない事なのではないかと思えてしまう。何故なら僕は今まで君以外の友人たちに誕生日を祝われた事がないのだから、こう思ってしまうのは仕方がない事だろう？

十二月二十五日にパーティーをするからと伝えたと、誰もが『クリスマスパーティーだね』と言うんだ。そしてパーティー当日も『メリークリスマス』と言ってプレゼントの交換を求めるんだ。預言者と同じ素晴らしき日に生まれた僕の為にではなく、イエズス・キリストの為に祝い事を行うんだよ。身近にいるのは僕であって、彼ではないのに。ああそうだ。それから、クリスマスと誕生日を兼ねてしまおうと言う親にも実はもう随分と辟易していてね、そんな見ず知らずの人の誕生日となんか兼ねないでくれよと何度思ったとか。ほら、どんなに有名だからと言って芸能人の誕生日会なんか個人で開いたりはいしないだろう？ これも同じ事だと思うんだよね。ところで、僕は一度皆をパーティーに招き、自分はプレゼントを用意せずに待っていたことがあるんだ。そうしたら皆興ざめだと言つて怒りだしてね。確かにその日付を見れば勘違いをしてしまうと言つのも頷ける事ではあるのだけれど、僕はきちんと『僕の』誕生日のパーティーである事は伝えていたんだ。預言者の、ではなくねにも関わらずそのような反応を示した彼らははつきり言つて無粋以外の何物でもないと思うのだけれど、どうだろう。

これはもしかしたら僕の傲慢以外の何物でもないのかもしれないけれど、当時の幼い僕にしてみればそれはとても重要なことであつて

云々。

全く、実に、面倒くさい。

ひたすらに続く彼の言葉達は、その一言に尽きる。

そんな彼に、誕生日には何が欲しいかと、電話をしてみた。生憎と彼は近くに居ないものだから、欲しいものが分からなかったのだ。幼い頃に遊んだ人形の類はもう必要ないだろうし、帽子や手袋、時計に至るまで装飾品を好まない彼にマフラーなど贈っても筆筭の肥やしになるだけだろうし、クリスマスの商品など以ての外だ。彼に合うものはそうそう見つからない。

それに時が経てば、場所が変われば、求めるものだって変わってくる。彼に贈るものを考えるのは、酷く難しい。面倒なのは思考回路だけにしてほしい。でなければこんなにも悩まずに済むのに。

「ああ全く、しち面倒くさい人」

だから、電話をしてみた。誕生日には、何が欲しいのかと。他ならぬお前の生誕の日だ、少しくらい奮発してやっても良いぞ、と。少し高飛車にそう言ってみた。

『なら、手紙をおくれよ』

嬉しそうに弾んだ声に、そんなもので良いのかと問いかけた。私の時には、彼は実に見事な簪を贈ってくれたのだ。それにすり合うような、何か美しいものかと考えていたのに。なのに彼は、手紙がよいと言った。

「……手紙、ねえ」

取り敢えず、綺麗な便箋と封筒、そして切手を買に行った。

？

拝啓、我が親友殿。

書き出してみて、なるほど、と思った。手紙と言うものは随分とその相手に集中するものなのだ、と新たに気付く。

便箋、封筒を選ぶ所から始まり、文机に向かい、万年筆を手に取る。そして、綴る。その過程の中に、相手を想わぬ時間というのは少しもない。しかも、年賀状や暑中見舞いとも明らかに性質が違ふ多くのひとの内のひとり、という形ではなくただ一人の為に綴られるこの手紙と言うものは、相手への想いを酷く、鮮明にさせるのだ。彼との想い出を、彼への思い入れを、心がひとつずつ思いだしていく。

これは確かに少々心地の良いものかもしれないな、と私は目元を綻ばせた。そして自分の誕生日の時にもひとつ手紙をねだってみようと思案する。

とは言え、変化のない日常に居る私の書く文章だ。然して面白いものではない。何か大きな事件でもあれば話は別だが、そんな愉快な事など何ひとつとして起きていない。その為、書く内容とは言えば、ちらちらと雪が降り始めたとか、今年は大根を上手く漬ける事が出来たとか、近所に美味しい甘味屋が出来たとか、そんなくだらないことばかりに限定される。

果たして、これで喜んでもらう事は出来るのだろうか。

そんな事を思いながら、最後に彼の生誕を祝う言葉を添えた。

十二月二十五日。

貴方はこの日を忌々しいと言って嫌うけれど、私は今日この日を心から喜びたいと思います。

この日は、貴方という私の最高の友が生まれた日です。どうかどうか、嘆かないで下さい。私は毎年、この日を心待ちにしているので、すから。貴方の心からの喜びを、私は心から祈りましょう。他の誰かの記念日であっても、私だけは必ず貴方の生誕を祝い、貴方の幸福を祈りましょう。

またいつか、貴方と合い見えることがありますように

そこまで書いて、ああ、そうだともう一言書き添える。

追伸 そう言えば、小さなころに私をお嫁さんしてくれる
と言っていました、それはまだ有効でしょうか

なんて、書きながらちよつとだけ笑ってしまう。ああ、手紙と言
うのは随分と自らを赤裸々にしてしまうものなのだなと思った。こ
んな言葉は、手紙でなければ伝える事など出来なかっただろう。口
にする事の出来ないことでも文章なら書いてしまおうと言うのは何と
も不思議である。面と向かつては言えないような事を相手に伝えた
いときには、手紙はとても便利なものなのかもしれない。

かしこ、と結んで、四折りにした。香を焚き染め、封筒に入れ、糊
づけをして、切手を貼る。そして、ふうとひとつ息を吐く。こんな
にも彼を思っていた事が今までに一度でもあつただろうか。いや、
『あつただろうか』などと思いを巡らしている時点でそれはないも
同然だ。

そう言えば、彼と別れてすぐの時には、毎日少しさびしい思いを
していたように思う。毎日、いつもどこかで彼を思っていた。それ
が一年経ち、二年経ち。居ないというこの状況が当たり前になつて
くると、思う事などほとんど言つて良いほど無くなっていた。劣
化し、色の褪せた写真を見て、時折ほう、と思ひ出すだけ。

それが、手紙を書いているその時間だけは、別れてすぐの時以上
に彼を思っていた。

なんとまあ、不思議な事。

ふふと笑つて、私は郵便局へと向かった。そして、十二月二十五
日ぴったりに彼の手元へ届くようにすることは出来るかと局員に問
う。

「ええ、出来ますよ。クリスマスのカードか何かですか？」

局員の浮かべる人の良い柔和な表情に、ああこれか、と彼の言葉を
を思い出す。

「いいえ、お誕生日の贈り物です」

そうですか、と局員は眉を八の字にして、少し申し訳なさそうに笑った。

「それでは、十二月二十五日丁度に着くよう、責任を持ってお届けいたします」

よろしくお願いいたします、とひとつ頭を下げ、郵便局を後にした。なんとなく、晴れやかな気分だった。

彼は一体、どんな顔をしてあの手紙を読むのだろうか。

思いながら、辺りを見回す。クリスマスのツリーやらリースやら、預言者の誕生を祝う街の景色は、目が痛いほどにきらきらと輝いていた。

「ああ全く、何が気に食わないのやら」

目に痛いほどの輝きは、まるで全ての人が彼を祝っているようにも見えて、嬉しくて、楽しくて。今まで私は気付きもしなかった。

彼は毎年、とても綺麗な、とてもきらびやかな誕生日を迎えていたのだ。元に戻らない緩んだ口元を両手で押さえ、私は家へと急いだ。早く帰って、彼との思い出に浸ろうと。

古い写真たちを引き出しの奥から引っ張り出さなくてはならないと、私は家へと駆けて行った。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0847r/>

手紙

2011年5月31日12時14分発行